

## 『サンディトン』に見る摂政時代

松 原 典 子\*

### 1. はじめに

『サンディトン』(*Sanditon*)<sup>1</sup>はジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) の人生最後の作品である。オースティンは1817年の1月17日に着手し、12章まで進んだ3月18日に執筆を断念し、7月18日に死去した。オースティンの6つの小説は長編<sup>2</sup>で、『サンディトン』はそれらの最大約6分の一程度である。また、どれもヒロインが冒頭から登場するが、『サンディトン』ではヒロインが誰なのか判然としない。第7章で「ヒロインのこの虚栄心を、作者は弁解するつもりはない。」(I make no apologies for my heroine's vanity. p.450) とあることから、サー・エドワード (Sir Edward) に話しかけられるシャーロット・ヘイウッド (Miss Charlotte Heywood) と考えられるが、シャーロットがヒロインであると断言することは、12章での断筆がそれを許さない。

『サンディトン』が未完ということで、本研究ノートでは他の作品との比較ではなく、作品の背景となっている時代に焦点をあて、その写実性に注目していく。

### 2. オースティンと摂政時代

オースティンの生まれたのは、ハノーヴァー朝第3代ジョージ3世 (1738-1820、在位1760-1820) 治世時の1775年であり、執筆活動は10代に始まる。その頃の作品は「習作時代」(Juvenilia, 1787-93) に分類され、その中の一つ「エリナとメアリアン」(*Elinor and Merianne*) は1797年に改作され『分別と多感』になる。そしてオースティンの最後の長編小説として『エマ』が1815年に出版される。

ところで、ジョージ3世は1811年に精神異常が不治のものと宣せられ、皇太子ジョージが摂政となり、ジョージ4世 (1762-1830、在位1820-30) として即位する。そのためオースティンの作家活動は摂政時代ということになる。つまり、『サンディトン』はこの「摂政時代」に書かれた。

本研究ノートで「摂政時代」に焦点を当てる理由は、オースティンのそれまでの作品と場面背景が異なると考えるからである。オースティンの小説の特性が、「田舎の村の3、4家族こそ題材としてうって

---

\* 本学特任教授

つけである」ことは周知の事実である。そして結婚をテーマとした長編小説作家として名声を得ている作風は、狭い世界の間人模様を皮肉と諷刺で描き、滑稽でありながら、登場人物をおおらかに肯定していることも周知の事実である。しかし、当時の社会にオースティンが無関心であったわけではない。オースティンの人生は、環境、範囲、経験どれも狭く浅いというわけではない。観察眼の鋭さは拙論「ジェイン・オースティンの『イングリッド史』」<sup>3</sup>でも指摘したが、歴史的人物に対する皮肉、諷刺も時代とその社会を映す辛らつな言葉で描いている。

ところで摂政皇太子についてであるが、1830年のジョージ4世の逝去時には「親不孝者、最悪の夫、不良国民、悪友」、「誰が彼のために涙を流すだろう。」とザ・タイムズ<sup>4</sup>は酷評した。放蕩人生を歩んだジョージ4世の代名詞は、ギャンブル、がぶ飲み、女性関係、莫大な借金というところだ。父ジョージ3世が長期療養に入った時点で、つまり1783年以降、皇太子時代から保養地ブライトン(Brighton)のカンバーランド公爵ヘンリー王子(Prince Henry, Duke of Cumberland)宅に入り浸っていた。その後、ヘンリー・ホランド(Henry Holland)が設計したマリーン・パビリオン(The Marine Pavillion)を生活の拠点とし、ジョン・ナッシュ(John Nash)の改装後は悪の巣窟となった。摂政皇太子となつてからの増改築の間(1815-22)も、パビリオンで遊興に耽っていた。ちなみにナッシュの再婚相手は摂政皇太子の愛人とされている。

一方、当時の上流階級は健康を気遣い、大理石の浴槽に塩水を入れて入浴するため、その多くがブライトンを訪れていた。18世紀半ばごろから、病気の治療目的に「シー・ベイジング」(sea bathing)<sup>5</sup>がもてはやされていたからである。19世紀になると、イングランド北部のスカールバラ(Scarborough)や中南部のバース(Bath)など、リゾート地は増加していった。イギリス海峡沿岸の中でも、ドーバー海峡に近い海岸部には多くのリゾート地が開発され発展していた。ブライトンはその中でも、軽薄で見栄張り、享楽にふけるリゾート地であった。

ところで軽薄の極みともいえる摂政皇太子であったが、オースティンの作品を愛読し、各居城に所蔵していた。1815年11月、摂政の図書専門担当者のジェイムズ・クラーク(James Clarke)から招待を受けたオースティンは、行状と評判から摂政皇太子に嫌悪感を抱き、皇太子妃キャロライン(Caroline)に同情していたことで難色を示していた。しかし、クラークからの勧めや家族からの諭しもあり、カールトン・ハウス(Carlton House)に赴き、丁重な案内を受け、次作を摂政皇太子に捧げてよいことになり、1815年12月に『エマ』を献呈<sup>6</sup>した。

### 3. 『サンディトン』

『サンディトン』に摂政時代の特徴である社会的・文化的特長である保養地、つまりリゾート、そしてリゾート開発への投機がどのように描かれているかを中心に物語を追っていく。

第1章の冒頭から登場するミスター・パーカー(Mr Parker)の目的は、サンディトンのリゾート開発と投機である。それまでのオースティンの作品には、リゾート開発と投機は描出されていないので新しい視点である。

この主人公と思われるパーカー氏の道程として、タンブリッジ(Tunbridge)、ヘイスティングズ(Hastings)、イーストボーン(Eastbourne)という地名が登場する。これらはイングランド南部沿岸の実在の地で、南東イングランド(South East England)に立地している。ちょうどケント(Kent)からイースト・サセックス(East Sussex)に至る地域である。現在でもそれらはすべて観光地で、海浜リゾート地である。

歴史を遡れば、海水が健康によいという医師リチャード・ラッセル (Richard Russell) が認知したことは前述 (注の5) したが、次に示した第2章の描写は、その定義と合致する。

「毎年最低6週間は海岸で過ごさなければ、確実に永続的な健康状態を保つ事は絶対に不可能……海辺の空気を吸った上で、海水に身体を浸せばなんにでも効き目があるし、潮風か海水のどちらか一方でも内臓や肺や血液のどんな不都合にも効能がある。ひきつけにも効くし、肺病にも、敗血症にも、胆汁分泌過多にも、リュウマチにも効く……身体を癒し、気分を和らげ、筋肉の緊張をほぐし、肉体を剛健にし、活力を奮い立たせてくれる。」

(no person ... could be really in a state of secure and permanent health without spending at least six weeks by the sea every year. The sea air and sea bathing together were nearly infallible, one or the other of them being a match for every disorder of the stomach, the lungs or the blood. They were anti-spasmodic, anti-pulmonary, anti-septic, anti-bilious and anti-rheumatic .... Sea air was healing, softening, relaxing—fortifying and bracing—seemingly just as was wanted ... p.424)

これは、投機に走るパーカー氏の力説である。

さて、オースティンは当時一番のリゾート地であったバースに一時居住した (1802-07年)。しかしバースは奥地にあり海浜ではない。『サンディトン』の背景に海浜を選択したのは、より健康に関心ある広範な階級を、つまり登場こそしていないが、例えば、弁護士、退役軍人、裕福な未亡人といったところを登場させる意図があったのかもしれない。これらの新興中・上流階級が登場するなら、より時流と合致するリゾート地を描こうとしていたとすることもできる。もちろん断筆では想像の域でしかない。しかし第11章で、金持ちの寄宿学校女学生たちや西インド諸島のプランテーション成功者の娘などが海水浴目的の保養に来る予約が入っている。これらもオースティンの狭く小さな世界でないことは明白である。

ところでサンディTONは地名として登場する。パーカー氏の力説を前述したが、それほど価値がある土地がサンディTONであるのは皮肉である。つまりサンディTONは'sand'を連想させるからである。つまり「砂」の表象的意味が問題なのである。At de Vries<sup>7</sup>の指摘では、砂には良いイメージが浮かばない。オースティンのねらいは何であったのか疑問がわくが、『サンディTON』というタイトルはオースティンよるものではなく、彼女の死後、家族が付けたものである。1816年にオースティン家に問題が起こった。兄のヘンリー (Henry) が銀行事業に失敗し、30,000ポンドの負債を負うことになった。現在のお金に換算すると、約20億超えといったところか。この事実を考えると、『サンディTON』という命名は納得できる。リゾート開発や投機に対し違和感を、そして失敗という負のイメージが家族全員に浮かんたろう。

ここで『聖書』の中の「砂」をイメージさせる描写を取り上げてみる。『創世記』22、17の、「私はあなたを祝福し、大いにあなたの子孫を天の星、海辺の砂のように増やすだろう」(I will bless thee, and in multiplying I will multiply thy seed as the stars of the heaven, and as the sand which is upon the sea shore.) から、サンディTONの発展が期待できる。しかし一方で、『マタイ伝』7、26-7の「砂の上に家を建てる愚かな人」(a foolish man, which built his house upon the sand) から、リゾート開発が失敗に終わるのではと危惧できる。聖職者で堅実なオースティン家の内実、思想、経験から、リゾートとブライTONが一体となり、'sand'+ 'Brighton' の造語に落ち着いたと考えることも可能である。

失敗と退廃こそがリゾート開発と投機に対するオースティン家の答えだったのではないか。

ではオースティン自身はどうか。彼女は「兄弟」(*The Brothers*)<sup>8</sup>というタイトルを考えていた。社会問題ではなく、個人に視点を当てた他の長編小説同様の展開にするつもりだったのかとも考えられる。万一、「兄弟」であるなら、その主人公は誰なのか。パーカー氏つまり Thomas Parker と弟 Sidney と Arthur しかありえない。彼らは第5章で登場する。リゾート開発と投機にのめりこむ兄パーカー氏に対し、二人の弟は不健康で気弱、新事業には全く無関心である。このパーカー3兄弟を主人公にするつもりだった可能性は十分ある。この選択、つまり男性の主人公というのはオースティンにとっては初めての試みとなるからである。

ではこの12章という短い物語を追っていく。

サンディトンへの途中、パーカー氏は馬車から降りるときに捻挫をし、ウィリンデン (Willingden) で医者を探しているところから始まる。近くに医者がいると信じるパーカー氏は、偶然ヘイウッド氏 (Mr Heywood) に出会う。ヘイウッド氏はパーカー氏夫妻を自宅で療養させる。その間、パーカー氏はサンディトンの素晴らしさを語る。サンディトンはサセックスの海辺の保養地で、新興の成長株で、自然に恵まれた有望な場所だと力説する。一方、リゾート地の価値が理解できないヘイウッド氏は「金と暇のある人が行く」(with money and time to go to them! p.418) 場所で、「天下国家のためにならない。間違いなく食糧の値段を吊り上げる事になる……」(Bad things for a country—sure to raise the price of provisions ... p.418) と否定的である。対するパーカー氏は、「ブライトンやワーシング、イーストボーンのような大きくなりすぎた場所はそうかもしれないが、サンディトンのような小さな村は全く別で、文明の悪などには染まらない……村が発展する」(It may apply to your large, overgrown places like Brighton or Worthing or Eastbourne—but not to a small village like Sanditon, precluded by its size from experience any of the evils of civilization; while the growth of the place ... p. 418) と反論する。二人のやり取りから、摂政時代の退廃した海浜リゾート、ブライトンが浮かぶ。特に「文明の悪」など、オースティンの皮肉、全開といったところである。

続いてパーカー氏は、サンディトンは沿岸部の中でも「最もすぐれた清浄そのものの潮風……細かな硬い砂で海岸から10ヤード行けばもう深くなっていて、泥もなく、海草もなくぬるぬるとした岩もなしで、海水に浸るには最適な場所で、病弱な人の歩調に格好の場所として自然が形作った最高の場所」(The finest, purest sea breeze on the coast—acknowledged to be so—excellent bathing—fine hard sand—deep water ten yards from the shore—no mud—no weeds—no slimy rocks. p.419) と紹介する。これはイングランド人の健康志向に合致し、海水、風趣が平凡でありながら、素晴らしい自然の賞賛といえる。しかしイーストボーンより「きっかり1マイルロンドンに近い」(The most desirable distance from London! One complete, measured mile nearer than Eastbourne. p.421) という距離は、健康増進目的は隠れ蓑で、土地開発でより多くの人間がロンドンから訪れることに繋がり、ひいてはブライトンのような悪の巣窟になりかねないというオースティンの皮肉である。

パーカー氏は何はともあれ、サンディトンがリゾート開発の投資に最高の場所と考えている。摂政時代以前からリゾート開発が進行していたことを考えると、サンディトンをこれからリゾート地にしようとするパーカー氏の思惑は、時代の潮流に乗り遅れていることは明白で、ここでも「砂」のイメージが浮かぶ。

ところで、パーカー氏は捻挫が治るまで親身に介抱してくれたお礼としてヘイウッド一家をサンディトンに招く。招待はサンディトンの素晴らしさを伝えることが目的で、情熱家 (an enthusiast p.422) のパーカー氏は他所の人間に、サンディトンがリゾート開発に最適な場所であることと、自分の夢

を見せびらかしたいのである。「サンディトンが小さな海辺の保養地として人気を集める事が彼の生きる目的……パーカー氏や地主たちはよい投資と考え始めた。」(the success of Sanditon as a small, fashionable bathing place, was the object for which he seemed to live .... having suggested himself and the other principal landholder the probability of its becoming a profitable speculation ... p.422) は、夢を追う彼らの姿を髣髴させる。パーカー氏はサンディトンのリゾート開発と投資で頭がいっぱいという状況である。つまり「サンディTONは彼の第二の妻であり子供だった。……その話題ならいくらでも話し続ける事ができた。とにかくすっかり心を奪われている。……サンディTONは彼の鉱山であり、宝くじであり、投機であり、おもちゃであり、職業であり、希望であり、未来なのだった。」(Sanditon was a second wife and four children to him ... it was his mine, his lottery, his speculation and his hobby horses; his occupation, his hope and hit futurity. p.423-4)。サンディTONにヘイウッド氏の家族を招きたかったのは、介抱に対する感謝の念があったからこそだと思える。ただ中流階級で経済的にも問題ないヘイウッド一家と接する過程で、パーカー氏はヘイウッド氏にリゾート開発に関心を持ってもらい、可能ならば投資者になってほしいと考えたのではないかと邪推できる。

一方、14人の子沢山のヘイウッド氏は一家揃っての外出など考えられなかった。それを見抜いたパーカー氏は長女のシャーロット (Charlotte) をサンディTONに招待する。しかし、シャーロットは大変健康で、健康増進目的の招待に応じる必要はなかった。ただ単に、パーカー氏の熱心さと見知らぬ土地に対する好奇心から招待を受けただけである。家族旅行もままならぬシャーロットは、別の世界を見てみたい、そして見せたいという両親の勧めから受けたに過ぎない。摂政皇太子の象徴であるブライトンのようなファッショナブルで退廃的のリゾート地ではなく、田舎で自然豊かな海浜であればと、ヘイウッド一家は判断したに違いない。ここまでがヘイウッド氏とパーカー氏のウィリンデン (Willingden) での初対面から、サンディTONに場面が転換する間の描写である。

オースティンの長編小説の冒頭では、登場人物の家系、家族構成が語られる。本人や家族が望む結婚条件に繋がる個人的描写が多い。しかし『サンディTON』には個人的描写や説明が極めて少なく、時代を映す社会の描写に多くが割かれている。これが最大の違いである。ただ冒頭からパーカー氏が目的地を間違えたり、捻挫するという喜劇的人物として描かれることで、リゾート開発と投機に失敗するのではないかと予見させてくれる。

ところでシャーロットが訪れたサンディTONには、パーカー氏と投機の共同出資者であるレディ・デナム (Lady Denham)、旧姓ブリアトン (Miss Brereton) という老未亡人が居住する。彼女は裕福な生まれだが、教育を受けていなかった。サンディTONの荘園と邸宅は、最初の結婚で得た土地の一部である。その後、サー・ハリー・デナム (Sir Harry Denham) との再婚で、レディの称号を得た。パーカー氏は「ちょっとお金に愛着がありすぎるのではないか。気立てはとてもよい……親切で気さくなお隣さんで、陽気で独立心が強い……生まれつきの分別を持ってはいるが、きちんとは磨かれていない。」(a little self-importance ... her love of money is carried greatly too far. But she is a good-natured woman, a very good-natured woman—a very obliging, friendly neighbour; a cheerful, independent, valuable character ... She has good natural sense, but quite uncultivated. p.427) と、紹介する。さらに投機、お金に関して「器が小さいところが見える場合もないわけでもなく、もう少し先の見通しがきくといいのだが、1、2年たてば、十分元手が取れるのが分からずに、ささいな支出でもしり込みする。」(a littleness will appear. She cannot look forward quite as I would have her—and takes alarm at a trifling present expense without considering what returns it will make her in a year or two. p.428) 人物である。つまりレディ・デナムは時代を冷静、適格に見通すことができない



人物であり、まさしく投機の失敗という伏線である。教育を受けていない女性、冷静さに欠如する女性は結婚できない、つまり否定されるか、拒絶される存在としてオースティンは描いてきた。レディ・デナムの今後をオースティンはどうしたかったのだろうか。いずれにしてもオースティンは、男性、女性に限らず、お金に執着する人物を価値ある人間と認めていない。

このレディ・デナムから提供された土地をパーカー氏は、「趣味のよい田舎風の小さな家を急ごしらえて、夏には入居者が殺到する。」(… he does what he can and is running up a tasteful little cottage ornée on a strip of waste ground Lady Denham has granted him, which I have no doubt we shall have many a candidate for before the end even of *this* season. p.429)と目論む。つまりレディ・デナムの初めての投資先はパーカー氏である。そんなレディ・デナムと同居するブリアト一族の姪であるクララ・ブリアトン (Clara Brereton) は「外見が優美なのと同様気立ても大変良く、その美しさもサンディトンの潮風を受けて以来完璧なものとなった。」(She was as thoroughly amiable as she was lovely; and since having had the advantage of their Sanditon breezes, that loveliness was complete. p.431)と描かれる。健康的美人のクララが、さらに素晴らしい女性へと成長するのも、サンディトンのおかげということだ。実際クララは性格、社会性、視野の広がりに関しても、称号だけのレディ・デナムを導く必要不可欠の女性へと成長すると思われる。クララのレディ・デナムに対する行動は、サンディトンへの投機と、リゾート開発の可否にどう関係するのだろうか。クララがパーカー氏の行動に全く反応していないことから、上昇した・できた人間であれば、開発と投機に一線を画すはずというオースティンの皮肉ではないのか。ではパーカー氏の場合は誰がその役割を担うのか。もちろん12章までには描かれていない。単に、「健全なる精神は健全なる身体に宿る」(エヴェナリス「諷刺詩」)<sup>9</sup>というところなのか。そうであれば、パーカー氏とレディ・デナムの活動は健康により左右されるという、これまたオースティンの皮肉であるのかもしれない。ところで、パーカー氏の捻挫が治癒し、体調が回復したのは、サンディトンに戻ったことが最大の要因である。彼は「海を見ただけで気力が充実」(His spirits rose with the very sight of the sea and he could almost feel his ankle getting stronger already. p.437)すると語る。しかしパーカー氏とレディ・デナムが、海浜が健全さの源と信じているところで断筆となっている。

12章までを読むと、パーカー氏の行動のほとんどがオースティン流皮肉で、それらはリゾート開発が頓挫する伏線である。こう考えると、オースティン家が断筆に『サンディトン』と命名したことも理解できる。

#### 4. 最後に

今回、『サンディトン』で注目したのはリゾート開発と投資である。それはオースティンの長編小説は結婚をテーマとした人間模様であったが、『サンディトン』の場合、当時の社会情勢を背景としているという点である。しかも『サンディトン』は、オースティンがサウサンプトン (Southampton) からハンプシャー (Hampshire) のチョートン (Chawton) に移った時期に執筆された。

サウサンプトンは18世紀半ば以降、上流階級がお気に入りの海浜リゾートであった。オースティンのような平凡な女性には溶け込みにくい世界であったろう。その前にリゾートで有名なバースで過ごした経験もあるが、何かしら感じる所があったのではないだろうか。聖職者であり、寄宿学校を経営する厳格なオースティン家は、当時の子女教育、つまり家庭の天使養成ではなく、娘（姉のカサンドラ (Cassandra) とジェイン）が望めば6人の兄弟と同様に教育を受けた。蔵書を自由に読ませもした。

つまり知的であったオースティンがリゾート地のファッションナブルな世界を垣間見て、それを異質のものと判断する素地は幼少からの家庭環境と教育による賜物といえる。これらリゾート地で社会を見る目が養われ、チョートンに移った時、少女時代を過ごしたカントリー、つまりオースティンにとってのヴィレッジの代名詞であるスティーブントン(Steventon)時代を思い出したと仮定すると、チョートンでの落ち着いた生活を取り戻した事で、リゾート開発と投機に走る人間模様を皮肉たっぷりに描こうとしたと考えられる。

習作時代の作品を書き換えたり、手直した時間が過ぎ、新に真骨頂である皮肉屋オースティンが選んだ世界、それが摂政時代であったとすることはあながち間違いではない。結婚をテーマとした世界が、オースティンの居住環境の変化により、リゾート開発と投機という社会の動きへと移行したのである。

## 注

1. 本研究ノートでは、*Sanditon, Lady Susan, & The History of England*, Macmillan Collector's Library, 2016 をテキストとし、引用は原文のままとする。日本語訳は『サンディトン ジェイン・オースティン作品集』、都留信夫監訳、鷹書房弓プレス、2017を参考とする。
2. 『分別と多感』(*Sense and Sensibility*, 1811、50章)、『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813、61章)、『マンスフィールド・パーク』(*Mansfield Park*, 1814、48章)、『エマ』(*Emma*, 1815、55章)、『ノーサンガー・アビー』(*Northanger Abbey*, 1818、31章)、『説得』(*Persuasion*, 1818、24章)
3. 「ジェイン・オースティンの『イングランド史』、中京学院大学『研究紀要』第25巻、2018年、3月、p.166-7。当時は「家庭の天使」、つまり娘時代は父、兄に、結婚後は夫に従属することを美德とする教育を受け、未婚の場合は厄介者として一生を終えるのが常識とされたのに対して、オースティン家は本人の興味を重視し、男女分け隔てない教育を与えた。結果、十分な知識から社会状況を把握できた。この環境が彼女の特性である、諷刺・皮肉を自由に発信できる素地となった。オースティン後の代表的女流作家であるブロンテ姉妹やジョージ・エリオット、ギaskell夫人と比較しても、家族関係は極めて良好で、親族からも深く愛され、成人する前に家族や親族の死を経験する事はなかった。これによって、孤独に苛まれる事なく、家族の大黒柱になることもなく、家族とともに生活し、平穏な人生を歩むことができたことも彼女の素地を活かすことになった。
4. 『英国王室史話』、p.522。1830年6月27日の記事。
5. 「Report、大磯町郷土資料館だより」に記述された、大磯とブライトン第1章をまとめると、次のようになる。海につかる行為(海水浴)は古代ギリシアに遡る。体系的「理由づけ」をもとに海水浴が始まったのは1750年で、イギリス人医師、リチャード・ラッセル(Richard Russel 1687-1759)が海水浴の仕方と効果の研究を“A Dissertation on the Use of Sea Water on the Diseases of the Glands”(「腺病における海水の使途について」)に発表後、ヨーロッパ中が海水浴場開設ブームとなった。オランダのライデン留学後、ブライトンの浜辺への療養を患者に積極的に勧め、海水に入り海水を飲用することが横隔膜のリンパの流れを改善し、治療の効果があるとした。つまり当時、温泉療養・鉱泉飲用が一般的であったのに対し、海水療法・飲用を臨床処方に取り入れた。“新鮮な海水を飲用し海に浸る”、“皮膚病の場合は、海藻で皮膚を摩擦する”、“精神的な病の場合も海に浴す”である。1753年にブライトンの浜辺に医院と療養施設を併設し、一般人に健康増・回復という魅力的「理由」で海水浴をすることを動機づけ、海に対する概念の変革を促した。ラッセルの死後、1783年、皇太子時代のジョージ4世がブライトンを訪れたことがきっかけで、一漁村からロイヤル・リゾートへと変貌した。
6. *A Memoir of Jane Austen and Other Family Recollection*, p.91-92によると、オースティンの兄ヘンリーの担当医マシュー・ベイリー(Mathew Baillie)が摂政皇太子の侍医であり、ジェインがヘンリーの看病のためロンドンに滞在していることを知ったクラークが摂政皇太子に伝えたことがきっかけで、クラークからカールトン・ハウス(Carlton House)に招待された。

7. 『イメージ・シンボル事典』、p.545によると、「砂」は次のように説明されている。
  1. 砂漠と関連して、不毛、徒労を表す。
  2. 無限で、数え切れない数を表す。
  3. 浜辺に関連して、希望（溺れることのない）安全性を表す。またははかなさを表す。
  4. 砂時計の連想から、時間を表す。
  5. 水に抗するがゆえに、忍耐、勇気を表す。
  6. 子供の目に砂を撒いて目をこすらせ、眠くさせるという眠りの性を表す。
  7. 岩と対極をなし、不安定さを表す。
  8. 火の粉とともに降りかかってくる焼け付く砂は、地獄における罰の一つである。
  9. 感受性を表す。
  10. 最も小さい世界、小宇宙を表す。
8. 『ジェイン・オースティン事典』、p.336。
9. 古代ローマの諷刺詩人ユウェナリス (Decimus Junius Juvenalis, BC.60-128) が『諷刺詩集』 (*Satvrae*) の中で、‘orandum est, ut sit mens sana in corpore sano’ ( 健やかな身体に、健やかな魂が願われるべき )、つまり健全な身体があれば、それに合致する精神を期待できる、という意味で、ローマ市民に対し、誘惑に打ち克つ勇敢な精神を求めたものである。

#### 参考・引用文献

1. 内田能嗣・惣谷美智子編、『ジェイン・オースティンの小説』、大阪教育図書、2012。
2. エリクソン C. 著、古賀秀男訳、『イギリス摂政時代の肖像—ジョージ四世と激動の日々』、ミネルヴァ書房、2013。
3. ドゥ フリース A. 著、山下主一郎主幹、『イメージ・シンボル事典』、大修館書店、1994。
4. 塩谷清人、『ジェイン・オースティン入門』、北星堂書店、1997。
5. トレヴェリアン C.M. 著、大野真弓監訳、『イギリス史 3』、みすず書房、1993。
6. ブラウン J. P. 著、松村昌家訳、『19世紀イギリスの小説と社会事情』英宝社、1992。
7. ポール・ポプラウスキー編著、向井秀忠監訳、『ジェイン・オースティン事典』、鷹書房弓プレス、2003。
8. 松村昌家・川本静子・長島伸一・村岡健次編、『新帝国の開花』、英国文化の世紀 I、研究社出版、1996。
9. 森護、『英国王室史話』、大修館書店、1997。
10. Adkins, Roy & Lesley. *Jane Austen's England—Daily Life in the Georgian and Regency Periods*, Penguin Books, 2013.
11. Allen, Louise. *The Georgian Seaside: The English resorts before the railway age*, Createspace Independent Publishing Platform, 2016.
12. Amy, Helen. *Jane Austen's England*, Amberley Publishing, 2017.
13. Austen-Leigh, J. E. *A Memoir of Jane Austen and Other Family Recollections*, Oxford University Press, 2008.
14. Cecil, David. *A Portrait of Jane Austen*, New York: Hill and Wang, 1978.
15. Craig, Sheryl. *Jane Austen and the State of the Nation*, Palgrave Macmillan, 2015.
16. Heydt-Stevenson, Jillian. *Austen's Unbecoming Conjunctions: Subversive Laughter, Embodied History*, New York: Palgrave Macmillan, 2005.
17. Johnson, Claudia L. & Tuite, Clara. *A Companion to Jane Austen*, Wiley-Black Well, 2012.
18. MacDonagh, Oliver. *Jane Austen: Real and Imagined Worlds*, Yale University Press, 1991.
19. Mazzeno, Laurence W. *Jane Austen: Two Centuries of Criticism*, N. Y. Camden House, 2011.



20. Southam, B.C. Ed. *Jane Austen: The Critical Heritage*. Vol.2, Routledge & Kegan Paul, 1987.
21. Todd, Janet. *Jane Austen — Her Life, Her Times, Her Novels*, , Andre Deusch, 2013.
22. 大磯町郷土資料館、「Report 大磯町郷土資料館だより」、2009-1-30 29。
23. 松原典子、「ジェイン・オースティンの『イングランド史』」、中京学院大学『研究紀要』第25巻、2018。
24. The Holy Bible, Oxford University Press.